日本農業新聞　令和７年１月28日掲載

農業技術プリズム

トビイロウンカの防除

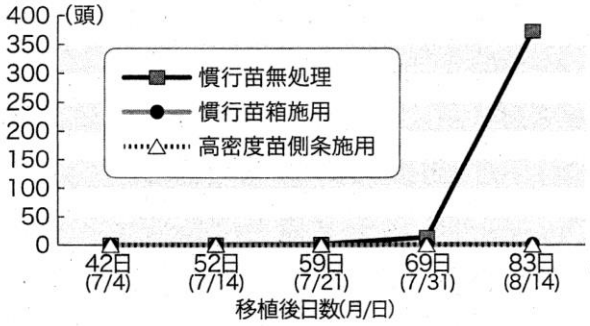
高密度播種苗移植と薬剤側条施用で効果

近年、規模が大きい経営体を中心に高密度播種（はしゅ）苗移植栽培が普及しつつあります。高密度播種苗移植栽培は、1枚の育苗箱に通常の2倍程度多く播種して育苗し、田植え機で1株当たり5本程度となるように小さくかき取ることで、移植に必要な箱数を約半分にできる技術です。

高密度播種苗移植栽培では移植する箱数が減り、育苗箱施薬剤の単位面積当たり施用量が少なくなるため、トビイロウンカの被害を受けやすい長崎県では、防除効果の低下が懸念されています。

そこで、特に飛来回数や発生量が多くなりやすい5月下旬移植の「なつほのか」で、高密度播種苗移植栽培の薬剤側条施用におけるトビイロウンカの防除効果について明らかにしました。

その結果、高密度播種苗移植栽培の薬剤側条施用は、慣行苗箱施用（1箱当たり50グラム）と比較してトビイロウンカに対する防除効果は同等で、無処理に比べると高い防除効果がありました。高密度播種苗移植栽培と薬剤側条施用を組み合わせることにより、省力・低コストでトビイロウンカに対する高い防除効果が期待できます。



なお、高密度播種苗移植栽培は播種量が増えることで苗の伸びが早く、育苗期間は2～3週間で、慣行の育苗よりも1週間程度短くなります。

（県農林技術開発センター農産園芸研究部門　作物研究室　主任研究員　中山美幸）